



▲写真 10:ニッポンバラタナゴを移し入れ



▲写真 11:かつてニッポンバラタナゴが生息していた池

讃岐平野でのお昼はもちろん、うどんです。お勧めの醤油うどん大（2玉）はたったの260円。味も値段もさすが、うどん県です。腹ごしらえをして次に向かったのは、かつてニッポンバラタナゴが生息していたという池でした（写真11）。その池にはタイリクバラタナゴが放流されてしまい、交雑したり置き換わったりしてしまったそうです。案の定、もんどりに入った個体もタイリクバラタナゴの特徴を強く有するもので、腹びれの前縁が白く、体も大きくてがっしりした体形でした（写真12）。この池も先の保全池と同様に細く狭い道が長く続く、かなり奥まった場所にありましたが、こんなところにまでタイリクバラタナゴが放流されてしまうことに驚きます。この手の「災害」は不可逆的で、外来魚による遺伝子の侵略がジワジワと一方的に進みます。特に池のような閉鎖域で放流されてしまうと、手の施しようがなくなります。正しい知識や自然に対するモラルを、もっと広く深く社会に知ってもらい必要があると改めて思いました。



▲写真 12:タイリクバラタナゴの特徴を有するバラタナゴ



▲写真 13:カワバタモロコを避難させたため池

最後に行ったのは、カワバタモロコを避難させた池でした（写真13）。近くの天然分布池にアメリカザリガニが侵入し、生息する個体の消滅を危惧して移したそうです。数日前には、カワバタモロコがわずかに確認できたということでしたが、当日入ったのはモツゴのみ。安定的に生息できているかどうか不安が残る結果となりました。昨年、この池にもアメリカザリガニが侵入して心配したそうですが、その日は確認できず、また、多様な水草が繁茂していたので、環境は一見良さそうに見えました。比較的丈夫な種だと思いますが、実際はなかなか難しいのかも知れません。

その日の夜は、研究会の皆さんと夕食をご一緒して楽しい時間を過ごし、高松市で一泊。翌日は河川の上中流域に向かいました。2日目の調査ターゲットはカジカです。カジカは冷たくてきれいな水が流れる川底で生活し、水質が悪化するととたんに姿を消すデリケートな魚です。河川工事が行われると、卵を産む空間である浮石の隙間に土砂が入り込み、繁殖ができなくなります。香川県内ではかつて安定的に生息していた場所があったそうですが、ダム建設によりその場所は壊滅しました。生き物に配慮しない工事がなされ、それに気づいた時にはどうしようもできなかった研究会は、さぞ無念だったと思います。香川県で絶滅に最も近いのは、先ほどのニッポンバラタナゴでもカワバタモロコでもなくカジカだと言います。研究会は強い危機感をもっておられました。